

プラトン主義断想

——滝 久雄 『貢献する気持ち』によせて——

眞方 忠道

はじめに

滝久雄氏は、中学二年の時友人の兄ががんを告知され残された数カ月の生命をどう過ごしたか——告知直後一心不乱に遊びはじめたが間もなく勉強に打ち込み死の淵まで学習に打ち込んだ姿——を知るという経験から、死を前にした時「人間の本質的な心のありかが見えるようになる」のではないかと感じ、そしてここから自分の哲学的思索が始まったと述懐する。すなわち「生命の終末や愛している人と別れなければならないときに、それまでの自分の生き方がどのようなであったかを、誰もが考えようとするだろう」という直感は、「人間の本質」とはいったい何かという問いに収斂し、ついに滝氏はホモ・コントリビューエンス（貢献する人間）という答えに到達する。ここでその当否を考察するのは小生の役割ではない。（もちろんこれまでにホモ・サピエンス、ホモ・ファーベル、ホモ・ルーデンスなど人間の本質を云い現わす試みがなされてきたが、人間の本能から「貢献する気持ち」を取り出して見せる氏の独創性とその説得力、応用力に敬意を表する者である。）ただ小生が興味をひかれるのは、滝氏がギリシアの哲学者、特にソクラテス、プラトンの示した哲学の道にひかれて進んだその「思索のパターン」である。

紀元前5世紀中頃活躍したソフィストたちは、各地を巡り歩いて民族間での慣習や法が異なることを体験した結果、各自が正しいと判断したことが正しいとされるにすぎないとする相対主義、「全ての人に共通した普遍的な基準はない」、人間を超えた普遍的真理の存在など考えられないという懐疑主義を標榜した。これに対しソクラテスは、「真理や本質は人間の《理性》でつかみ取ることができる」といった考え方、つまり人間の本質は個々の人間の価値判断にゆだねられ、それなりによしとされるものではなく、理性で考察され思惟され、初めて獲得されるという考え方」に立って青年たちと対話をかわすことによって、真理探究の道を歩んだ。その際出発点となるのはソクラテスによる無知の告白であり、人間が無知な存在であること、この確かな事実の発見は逆説的に聞こえるが、人間の本質に関して真理が存在することを確信させることになる。ソクラテスは「いつでも、どこでも、誰にでも、絶対に正しいとされる本質」とか「真理」という「在って見えないもの」に理性によって接近することに自分の使命を見出した。その弟子プラトンはさらに一歩進めて例えば「人間」と「人間の本質（人間の理想像）」を別々の世界に分けて考えた。目に見える世界と、そこに見えるもろもろの本質が存在している理想の世界（イデア界）とを分けて考える二元論である。プラトンは、目に見える世界は人間が「経験」できる領域なのに

対し、経験できない理想のアイデアの世界は「理性」によって接近することができるとする。では、いつどのようにして人間に、アイデアを目指して理性が発動するのか。プラトンは、魂がかつてアイデア界に住んでいたが、感覚界に生まれた際に、かつてアイデアの世界で見慣れていた本質を魂は忘れてしまった、しかし感覚界で出会うさまざまな形を見ると、魂がおぼろげながら覚えている本質にめぐりあう瞬間がある、すると魂は再びアイデア界という本来のすみかに、熱い想いを馳せるようになり、真理へのエロスに誘導されながらアイデアに向かうのだと主張した…

以上は滝氏が自分の言葉でソクラテス、プラトンの哲学の目指した所を語ったものを筆者が勝手に要約したものである。ここで筆者としては、感覚される個々の存在や価値の「ひながた」となるそれぞれの本質、「いつでも、どこでも、誰にでも、本当に正しいとされるたった一つの本質がある」とする世界観に賭けて滝氏が「人間の本質」について思索を進めたところに興味をひかれるのである。というのは、この世界観はその可否は別にして一括して「プラトン主義」と呼ばれるものであり、プラトン哲学研究に取り組んできた者としては、「プラトン主義」の系譜から学ぶものがあるとすれば何かについて興味を掻き立ててくれるからである。

なお現代、「プラトン主義」(Platonism、Platonismus、platonisme、プラトニズム)は特に数学の哲学では、数学的対象の地位をどう考えるべきかをめぐって、数学的実体が実在すると主張する一学派を指すのに用いられている。それによれば、数学的実体は抽象的であり、空間的、時間的、因果的な束縛を受けることなく、永遠不変な存在である。滝氏のプラトンから汲み取ったところと相通じるものがある。普遍的究極的実在に対し感覚によって捉えられる日常の世界はその似姿にすぎないとするこうした考え方を、プラトン主義の常識的理解としておくことにする。

以下小論では、プラトン哲学から「プラトン主義」の誕生と系譜を辿ることは筆者の力量を超えるのであきらめ、上記の常識的理解によるプラトニズムをめぐって気になる人物を選び考察を加えてみたい。従って系統的というよりは恣意的、断片的な論述——断想——になることを断わっておく。

1 ホワイトヘッド

「ヨーロッパの哲学伝統のもっとも安全な一般的性格づけは、それがプラトンについての一連の脚注からなっているということである」(山本誠作訳、以下同)との有名な一句を残したホワイトヘッドは気になる人物の一人である。この句は、すでに数理哲学と相対性理論の基礎付けで科学哲学の偉大な功績をあげていたこの哲学者が自分の「有機体の哲学」を体系化して世に問うた『過程と実在』に登場する。この書は近代の人間中心主義と科学を支配する機械論的自然観に対し、神、自然、人間の結びつきを調和ある有機体として捉える宇宙論(コスモロジー)を展開する。この中で彼は「もしわれわれが、プラトンの一

般的見地を、社会組織、美的成果、科学、宗教等において〔プラトンと現代の間に〕介在する二千年の人間経験によって必要となった最小限の変化を加えて提出するならば、われわれは有機体の哲学の構成に着手しなければならない」（『過程と実在』第二部第一章第一節）と述べ、とくにプラトンの『ティマイオス』が二千年も時代を先取りしていると語る。ここで有機体の哲学を紹介するのは筆者の目的ではない。ただこの哲学者の眼差しに注意を払いたい。

人間を含めすべてのものとことがらを包み込むこの宇宙を「多くの現実的実質の連帯として記述する」というのがホワイトヘッドの目指すところとされる。この「現実的実質」（現実的存在、活動的存在、actual entity）は彼にとって有機体の哲学を記述するための基本的なカテゴリーの一つである。ホワイトヘッドは、プラトンの形相を永遠的客体と言い換える。この永遠的客体は潜勢態であり、これが時間的世界に「進入」することにより生成を伴う現実的事物に関与する。その際現実の具体的事物すべてが「現実的実質」として捉えられる。

「現実的実質」——現実的契機とも呼ばれる——は、世界が構成される究極的な実在的事物である。何かもっとリアルなものを見いだそうとして、現実的諸実質の背後を探究する由もない。それらは互いに相違している。神は一つの現実的実質である。そしてはるか彼方の空虚な空間における最も瑣末な一吹きも、またそうである。重要さに段階があり、機能にさまざまあっても、現実態が例示する原理において、すべては同一レベルにある。窮極的事実は一様にみな、現実的実質である。そしてこれらの現実的実質は複合的かつ相互依存的な経験のしづくである。

（『過程と実在』第一部第二章第一節）

きわめて難解であるが、乱暴な言い方をすれば、これはアイデアを分有することによって感覚的個物が存在するとするプラトンのアイデア論に、アリストテレスの潜勢態と現実態による生成消滅論を融合させたものとも表現できるかもしれない。いわば永遠的客体のもつ可能性が、常に過程（プロセス）にある現実のリアルな世界において現実態となる事態をありのままに記述するカテゴリーの一つが「現実的実質」なのである。ホワイトヘッドは有機体の哲学を記述するのに必要なカテゴリーとしてこの他に「抱握」（prehension）、「結合体」（nexus）、「存在論的原理」（ontological principle）をあげるが、筆者の関心にとっては以上で充分である。

この現実世界は、われわれの直接経験の主題という形において観察されるように拡がっている。直接経験の解明は、どんな思想をも正当化する唯一のものであり、思想の出発点は、この経験の構成要素の分析的観察である。

（『過程と実在』第一部第一章第二節）

哲学が無力さの汚名から解放されるのは、それが宗教ならびに科学——自然科学ならびに社会科学と密接に関係することによってである。哲学がその重要性を達成するのは、両者つまり宗教と科学とを、一つの合理的な思考の構図に接合することによってである。

(『過程と実在』第一部第一章第六節)

哲学の有益な機能は、文明思想の最も一般的な体系化を増進することである。専門と常識との間には、絶えず反作用がある。常識を修正するのが、特殊科学の領分である。哲学は想像力と常識とを溶接して、専門家を抑制し、また専門家の想像力を拡大させる。類的観念を供給することによって、哲学は、自然の母胎のなかで実現されないままになっている涯しなく変化に富んだ特殊な事例をより容易に理解しうるようにするべきである。

(『過程と実在』第一部第一章第六節)

これらの句はホワイトヘッド哲学の基本姿勢を示唆する。自然の営みから人間のあらゆる営み、さらに神をも含めて、具体的な生の現実を理解しようとする試みといえるであろう。その際プラトンとは異なり、アイデアを感覚経験される世界から離存するのではなく、生成変化するまさに直接経験されるこの世界を現実化する力として捉えなおしているのである。生成流転するこの世界が在りかつ在らぬものではなく、かけがえのない有機体として現前していると観るこの宇宙論には、常識的ないし通俗的プラトン解釈に対する批判と超克が秘められている。

2. ニーチェ

反キリスト者を自認したニーチェのプラトン哲学理解も筆者としては興味をひかれる。というのは、彼は「キリスト教は《大衆》むきのプラトニズムである」(『善悪の彼岸』)と断言するからである。ツァラトゥストラはかつて自分も「背後世界論者」であったことを告白する。「背後世界論者」は自分の苦悩から目を背け、人間の彼岸に永遠の真の世界があると信じ、この大地と身体を捨て天界に至ることによって救済と幸福を獲得することができると信じる。だがしかし、神々や背後世界は無気力な人間が創造したものに過ぎず、虚無なのである。いまや「神は死んだ」のであり、人は真っ向から自己の苦悩を引き受け、身体と大地に意味を賦与する人間に生まれ変われるのだ。(『ツァラトゥストラ』) ここにはキリスト教批判が秘められていることは明らかであろう。ニーチェにとってキリスト教は、弱者が強者に対して抱くルサンチマンの生み出した弱者の道德・弱者の宗教である。その説くところによれば、彼岸こそ真の世界である、この永遠の世界にあこがれて弱者は此岸で禁欲的生活を送る、これに対しこの世で力を誇る強者はあの世で報いを受けねばならないのである。

このキリスト教的世界観をいわば準備したのがプラトンの哲学であり、その点でこの哲学者は「背後世界論者」に入ることになる。牢獄である肉体から魂が解放されてはじめて真実在に近づくことができる、それが完成されるのは死によってである。感覚によって私たちが捉えるのは「思い込み（ドクサ）」の世界にすぎない、「真の知識（エピステーメー）」は厳しい訓練を経て磨き抜かれた知性（ヌース）によってのみ獲得される。感覚される世界と知性によって捉えられる世界とは区別され、前者は「在る」とも「在らぬ」とも云えない世界、後者こそ「真に在る」アイデアの世界である。このアイデアの世界を求めることなく欲望の赴くまま放埒な生を送る人物には死後劫罰が待っている。

プラトンは全力かたむけて…理性と本能とがおのずと一つの目標に、つまり善に、〈神〉に向かうものだというのを、証明しようとした。そしてプラトン以来すべての神学者と哲学者が、これと同じ道をとってきた。——要するに、道徳のことがらにおいては、これまで本能が、キリスト教徒の呼び方でいえば〈信仰〉が、私流儀にえば〈畜群〉が勝利をしめてきたのだ。

『善悪の彼岸』信太正三訳

…プラトンに対する私の不信は深い。すなわち、私は彼を、古代ギリシア人の根本本能からきわめて逸脱したもの、きわめて道徳化されたもの、きわめて先在キリスト教的なものともみとめるので…私はプラトンという全現象について、《高等詐欺》という、ないしは、聞こえがよいというなら理想主義という手厳しい言葉を…使いたい。

『偶像の黄昏』原佑訳

などなど、ニーチェのプラトン批判はきびしい。キリスト教と同様プラトニズムも、苦悩に満ちていても身体を肯定し、常に新しい明日に向けて生を選び取ってゆく、生き生きとした人間の此の世での生きざまを否定する点がこの哲学者には許しがたかったのであろう。

ただし序ながらニーチェは、その発言を額面通りに受け取ってよいのか悩ませる哲学者である。彼の激しいキリスト教批判も、実は彼なりのあるべきキリスト教が胸中であって、現行のキリスト教会がちょうどイエスが批判した祭司やパリサイ派が力をふるっていた当時のユダヤ教と似たような過ちを犯していることを告発するものであった、とする解釈も成り立つのである。とすると彼のプラトン批判も、感覚界と叡知界を峻別し後者が真実在の世界であるとし、肉体を軽蔑し死後の報酬を目指して禁欲的な生を勧める教科書的なプラトニズムに対するものだったのかもしれない。

3. カント

カントは、理論的科学的認識の対象はあくまで現象の世界であり、その背後にあると想

定されてきた「物自体」について思弁することは純粋理性の越権行為であるとしたとされる。「物自体」という語はプラトンがアイデアの言い換えとして用いた「…自体」（美そのもの、美自体、正しさそのもの、正しさ自体、などなど）を連想させるので、筆者としては立ち止まりたくなる相手である。周知の通りカントは『純粋理性批判』において、学の基礎付けとその限界を明確に示そうとした。その際の学とは自然科学や形而上学のように思弁的理性が対象とする認識に根ざす知の体系である。この認識は、先験的な感性の直観形式である時間・空間によって提供される素材に、悟性が、純粋悟性概念すなわちカテゴリーによって整理を加えることによって普遍妥当性を獲得する。すなわち対象がわれわれの認識によって構成されるのであり、それまで当然とされていたように対象にわれわれの認識が依拠するのではない。（コペルニクス的転回）この構図によれば、知性と存在は必然的に一致するのでここに真理が成立する。その代わり、純粋理性は純粋悟性概念（カテゴリー）を経験の枠外に適用することはできない。もしこれを試みるならば物自体とか経験不可能な無制約者（靈魂、世界全体、神）などの超越論的仮象にとらえられることになる。これらを理論的認識の対象とすることは純粋思弁的理性には許されないのである。

ところでカントは、純粋理性の学的認識に対し、何をなすべきかにかかわる実践理性の対象とする世界を区別する。しかも「信仰に場所を得させるために、認識に制限を加えねばならなかった」という句が示すようにカントは、純粋理性の経験を越えた使用という越権行為をおさえることによって、人間の行為、実践の場の絶対的普遍的価値尺度の基礎付けが可能になると考える。そこで『実践理性批判』では、定言命法にみられるような人間が無条件に従うべき道德律の存在、しかも他からの強制によるのではなく自律的に道德律を遵守する意志の自由が導出される。と同時に、道德律の究極の実現は本来道德の目的ではないとはいえ幸福な生を実現する。但し人間が有限であるかぎり現実には不可能である。にもかかわらず実現可能を目指して人間は無限に進んでゆく。ここには人格ないし靈魂の不滅が前提される。さらに、徳と幸福の一致という人間に実現不可能と見える理想を可能とする全能の神が存在すると考えなければ、この理想をめざす人間の実践の努力の要求は空しいものとなるであろう。こうしてカントは、靈魂の不滅と神の存在を実践理性の「要請」として認め、実践の場では物自体について語る事が可能であるとする。

ここでカントのプラトンに対する言及を瞥見しておきたい。

軽快な鳩は、自由に飛んで空気を別け、空気の抵抗を感じるが、そこで鳩は空気のない空間ではもっとよく飛べるだろうという考えをもつかもしれない。これとおなじようにプラトンは、感性界が悟性に窮屈な枠をはめるという理由から感性界を去り、アイデアの翼に乗って、感性界の彼岸へと、つまり純粋悟性の真空のうちへと飛び込んだのである。

（『純粋理性批判』B9、宇都宮方芳明訳、以下同）

この句にはプラトンが思弁的理性を、経験を越えて使用したことへの批判がこめられている

る。この点は、霊魂、世界、神という超越論的仮象を批判する「超越論的弁証論」においても明瞭であるが、しかしカントは、そこではプラトンの功績に敬意を表しつつ批判しているのである。仮象批判に先立ってカントはこうした仮象について理性が思弁するに至る必然性を明らかにするために、「理念（イデー）」について考察を加える。当然イデーはプラトンのイデアに由来する語であり、カントはプラトンを手掛かりにする。

プラトンにとって理念は、物そのものの原型であって、カテゴリーのように可能的経験のための鍵にとどまるものではない。プラトンの考えによれば、理念は最高の理性から流出し、そこから人間の理性に与えられたのであるが、しかし人間理性は今ではもうその原初の状態にはなく、今ではひじょうに不明瞭になってしまった古い理念を、想起（哲学と呼ばれる）によって苦勞して呼び戻さなければならないのである。

（『純粋理性批判』 B 370）

「流出」の語に見られるようにプロティノスの新プラトン派の影響が濃厚であるが、「原型」「想起」などプラトンのイデア論の常識的理解を示している。この理念についてカントは以下のように実践の場においてその意義を認める。

プラトンはかれの理念を、特にあらゆる実践的なもののうちに、すなわち自由にもとづく一切のものの中に見出したが、この自由は、これはこれで、理性に固有な所産としての認識に従っている。…ある人物が徳の模範としてわれわれに示される場合、われわれはそれでもつねに真の原型を我々自身の知力のなかにだけ持っていて、模範と称された人物をこの原型と比較し、この原型にしたがってのみ評価するのである。…道徳的価値の有無にかんするあらゆる判断は、この理念を介してのみ可能だからである。したがってこの理念は、道徳的完全性へと接近するいずれの試みにあっても、その根底に必然的に存している…

（『純粋理性批判』 B 372）

…プラトンは、人間の理性が真の原因性として働き、理念が作用因（行為やその対象の）となる領域、すなわち人倫の領域においてのみならず、自然そのものに関して、自然の起源が理念にあることの明白な証拠を見て取っているが、これはもつともである。一つ一つの植物や動物、そして規則的に整えられた世界の組織（したがっておそらくは全自然秩序もまた）は、それらが理念にしたがってのみ可能であるということを、明らかに示している。…世界秩序の自然的なものの模写的観察から出発して、目的にしたがった、すなわち理念に従った世界秩序の建築術的結合へと上昇する、この哲学者の精神の高揚は、表現の行き過ぎを別にすれば、尊敬と信従に値する努力である。だがそれは、人倫性、立法そして宗教の原理にかかわる事柄において、きわめて独特の功績なのであって、そうした事柄においては、理

念が経験のうちに完全に表現されることは決してありえないにしても、理念が経験そのもの（善の）をはじめて可能にするのである。

（『純粋理性批判』B 375）

ここでカントはプラトンに対してアンビヴァレントである。つまり「人倫性、立法、宗教」にとって「理念」（純粋思弁的理性にとっては仮象となる）を見出した点を高く評価するが、自然に関して「自然の起源」とか「諸物の根源的な原因」などの理念を導入したことは評価できないことを、敬愛をこめて語っているのである。（amicus Plato, sed magis amica veritas. プラトンは友である。しかし真理はさらに大切な友である。）

以上、少々杜撰な紹介となったが、筆者は、いわゆるプラトニズムにきわめて近い思索のパターンをとりながら、プラトンのアイデアの学的認識は不可能と断定し、アイデアを「要請」という形で救おうとしたカント、という解釈の可能性を示したかったのである。確かにプラトンのアイデアないし善のアイデアの存在を臆下丹田に力をこめて断定することは困難だとしても、「要請」とか「理想型」といわれれば納得できる人々は多いのではあるまいか。ただしプラトンの意に添うかどうかは別問題である。

4. アウグスティヌス

『告白』によれば、アウグスティヌスは16歳の時弁論術で身を立てるべくカルタゴに遊学し、恐らく母の願いからであろうがキリスト教の教会に通いつつも、若い血のたぎりからの誘惑に負け奔放な生活を送っていた。ところが、キケロの『ホルテンシウス（哲学のすすめ）』に出会い「不死の知恵」を熱烈に求め始めたという。『ホルテンシウス』は若いアリストテレスが師プラトンに心酔して書いた『プロトレプティコス（哲学のすすめ）』を手本にしたとされる。しかしアウグスティヌスはその情熱をキリスト教の異分派のマニ教にむけ、聴聞者として9年間を過ごす。激しい情念との葛藤のなかにあったこの青年は、この宗派で聖者と呼ばれる人物たちに捧げものを供することによって、闇（＝悪）と光（＝善）が混合した現在の状態から、聖者の力により光へ復帰し救済されるとの主張に現実味のある実践の拠り所を見出したのかもしれない。しかし聖者の地位にある者の行状に失望し、またマニ教の書物に書かれている宇宙論の荒唐無稽に気付いたアウグスティヌスは、修辞学の教師をしていたローマからミラノに移った際、司教アンブロシウスとの出会いを機にマニ教から離れカトリックの洗礼志願者となる。だがこの頃のアウグスティヌスは完全に回心に至ることはなく、むしろアカデミア派の哲学者たちの「万事について疑わねばならない…いかなる真実も人間にはとらえることができない」（『告白』第5巻10章）との主張に共感をおぼえたという。特にキリストの受肉の教えが彼にとっては躓きの石であったが、アカデミア派の哲学者が懐疑の立場に立つがゆえに一層熱心に探求を進めるという

態度に動かされて真理の探究に熱中する。このあたりの体験をふまえて、後に『神の国』でアウグスティヌスはアカデミア派が祖とあがめるプラトンおよび彼に従った人々（プロティノス、ポルフェリオス、イアンブリコスなど新プラトン学派）についてキリスト教との親近性と限界を論じている。

プラトンは、わたしたちの信仰が支持し擁護する真の宗教に賛成し、他のものにおいてそれに反対しているように思われるのであり、その論点というのは、死後にある真実に浄福な生のために一神を崇拝すべきか、他神を崇拝すべきかという問題である。すなわち、異教徒の他の哲学よりもはるかに、また正当にもすぐれていると考えられるプラトンを、とくに鋭く、とくに真実に理解し、それに従ったという名声を得ている人びとは、おそらく神についてこういうことを考えるであろう。…すなわち、人間は、かれ自身のうち、とくにすぐれているもの、すなわち理性を通じてすべてのものよりすぐれているものに、すなわち、それなしにはいかなる自然的存在も存在せず、いかなる教説も教えず、如何なる実行も役立たない、唯一真実最善の神に到達するようにつくられているとすると、そこにおいてすべてがわたしたちに結びつけられているかたが求められ、そこにおいてすべてがわたしたちにとって確実であるところの方が認識され、そこにおいてすべてがわたしたちにとって正しくあるところのかたが愛されなければならないのである。

（『神の国』第8巻、第4章、服部英次郎訳、以下同）

それゆえ、プラトンが、この神をまね、知り、愛する者こそ智者であり、それにあずかることにより、智者は浄福になるといったとすると、他の人びとの説を吟味して見るなんの必要があるだろうか。プラトン派の人びとほどわたしたちに近づいたものはなかったのである。

（『神の国』第8巻、第5章）

…この真でかつ最高である善をプラトンは神であると主張するのであり、したがってプラトンは、哲学者は神を愛するところのものでなければならぬというのであって、それはなんのためかという、哲学、すなわち知恵の愛は至福の生を目指すものであるから、神を愛するところのものは、神を享受することによって至福とならねばならぬからである。

（『神の国』第8巻、第8章）

このようにプラトンないしプラトン派を高く評価しながらも、アウグスティヌスは彼らが結局、御利益的な多神教とダイモン崇拝から抜け出ることができず、真の神を知らなかった点を厳しく批判する。ここで筆者は、『神の国』での神学的に整理されプラトン派批判に深入りする余裕はない。その代わり、プラトン派と決別するに至る心情をもっと素朴に吐露している句を紹介したい。それは『告白』の一節である。

木の繁る山の頂から平和の祖国をのぞみながら、いたるべき道を知らず、いたずらに道のない所を進もうとして、獅子と龍とを首領にする逃亡の敗残兵に包囲され、待ち伏せにあうようなはめにおちいる…

（『告白』第7巻、第21章、山田晶訳）

プロティノスなど新プラトン学派を介してではあるが、プラトンが描いてみせる「善のアイデア」のもとに秩序立てられた世界を知り、そこにあこがれつつも善のアイデアの存在を全身全霊をもって告白することができない、そこに至る険しい道は示されているものの一歩踏み出すや哲学者たちのさまざまなドクサが入り乱れ、結局深淵を前に立ち止まらざるを得ない——このはがゆさ、不安、動揺、欲求不満がこの句にこめられていると感じるのは筆者だけであろうか。『国家』の「洞窟の比喩」を辿った後に現代のわれわれが善のアイデアについて抱く感想と相通じるものを感じられてならない。

5. プラトン

以上時代を溯るかたちで四人の哲学者をとりあげ、プラトンないしプラトニズムへの対応を見てきた。そこには通底するものがあるように思われる。それは、感覚経験の世界とは切り離された叡智界があり後者は真理が開示される世界であり、前者は信頼するに足りない臆見しか得られない仮象の世界である、という主張をプラトンから読み取るものである。このプラトン理解は二つの反応を生む。第一は、アイデア、さらに善のアイデアは実在として認識できないのではないかという懐疑である。第二は感覚経験の世界、あるいは此岸を仮象とみなすことへの不満である。前者のケースで、カントは実践理性の「要請」というかたちでプラトンを救おうとし、アウグスティヌスは神の恩寵により決別しカトリックの信仰にはいったと告白する。後者のケースで、ホワイトヘッドはアイデアを可能態としてとらえ、時々刻々変化を遂げる現実世界にこのアイデアが現実態となる過程をとらえる形でプラトンを救おうとし、ニーチェは死後の彼岸の生を真実の生と教える背後世界論者の元祖としてプラトンを排撃し、苦悩に満ちるこの世の生を雄々しくひきうける実存的な超人の思想に到達する。

しかしここでまとめたような解説——感覚界と叡智界を分断する二元論に立ち、感覚界から理性を解放せねば知性的にも道徳的にも人間が完成されることがない——というような解説で、果たしてプラトンの真意を捉えているのであろうか。以下ではプラトニズムと呼ばれるにいたる典型的な主張の登場する『パイドン』を中心に、筆者なりのプラトン理解の一端を示すことに努めることにしたい。

ソクラテス最後の日に牢獄で交わされた対話を伝えるかたちになっているこの対話篇に、哲学とは何か、哲学者はどのような生を送るべきかが述べられる箇所がある。そこでは、「肉

体は魂の墓場である」との基本的な認識にたつて論が進められる。肉体は生命維持のための煩わしいことや、愛欲、欲望、恐怖、妄想などなどにより魂を惑わし、魂が純粋な思惟を用いてそれぞれのものの本質をつかまえ、真理と知恵を獲得するのを妨げる。そこで真に知を愛し求める哲学者はできる限り魂を肉体から切り離そうと試みる。しかしそれが実現するのは、肉体から魂が解放される死においてである。したがって生きている間、哲学者は「死の練習」に努めるのである。（『パイドン』 64a—68c）——ここにはいわゆるプラトニズムと呼ばれる主張がほぼ出そろっている。しかもこの対話篇では輪廻転生も当然のこととして承認されており、死後の裁き、現世で送った生活に応じて次の世代で何に生まれ変わるか、また真の哲学者が手に入れる死後の幸福についても語られる。（『パイドン』 81c—82b, 107c—114c）ニーチェの攻撃は的外れではないといえよう。

だがしかし、確かに文字に記されてはいるものの、はたしてプラトンが此のとおり信じていたのかとなると必ずしも肯定するわけにはいかないように思われる。まずソクラテスに語らせるという著作の手法が問題である。このソクラテスは対話篇によって主張が変わるのは確かである。例えば死後の世界について『弁明』ではほとんど不可知論に近い立場をとる。（『弁明』 40c—41c）『パイドン』では黙示録のように地球の構造、死後の懲罰などが語られるが、最後にソクラテスは次のように断る。

「さて、地下世界に関する以上の話が僕の述べた通りにそのままある、と確信をもって主張することは、理性をもつ人に相応しくないであろう。だが、魂がたしかに不死であることは明らかなのだから、我々の魂とその住処についてなにかこのようなことがある、と考えるのは適切であるし、そのような考えに身を託して危険を冒すことには価値がある、と僕には思われる。——なぜなら、この危険は美しいのだから——」

（『パイドン』 114 d、岩田靖夫訳、以下同）

死後の審判についてのミュートスは他に、『ゴルギアス』や『国家』の終わり近くにも登場する。『パイドン』と同じように、いずれも対話が目指す結論に達したあとに、あたかも補遺のように語られるのが特徴である。プラトンは、議論によって反論できない立場に追い込まれながら、なお充分納得できていない弟子（あるいは私たち）に対して、人生の現場に一步踏み出すきっかけを与えようとするレトリックの一つとして使用したのかもしれない。

また『パイドン』の一節で、哲学者以外の人々が、例えば節制にはげむのは、或る快樂を失うことを怖れて別の快樂を控えているに過ぎない、つまり彼らは或る種の放縦によって節制を実現しようとしているのだ、これは真の節制ではない、その他の徳についても同様である、という議論をソクラテスは展開する。（『パイドン』 68e—69a）これを此岸と彼岸に適用すると、死後の懲罰をおそれて此の世で正義の生に励むのは、真の正義ではないことになろう。この点は、『国家』において探求されることになる。すなわち、此の世や彼

の世での報酬や懲罰とは一切関係ない「正義それ自体は何か」の探究が、ソクラテスに課せられるのである。(『国家』第2巻、367b) ここから推測できることは、プラトンにとって重要なのは、徳そのものの実現であり、彼の世とか此の世とかは付带的ではなかったか、ということである。ただプラトンの生きていた社会では、彼岸や此岸の生が話題になるのが常識となっていたが故に、弟子たち及び一般の市民へのサービスとしてトピックにとりあげただけなのかもしれない。あるいは、此岸から彼岸までを通じて生を考えると、という勧めには、「永遠の相において」人間の生きるべき道を考える、という主張がこめられていると解するのはちがすぎであろうか。

次に注目したいのは、この対話篇での「想起 (アナムネーシス)」の説明の一節である。靈魂不滅の証明の一つが、「学習は想起に他ならない」ことから試みられる。例えば等しい石材とか木材が並んでいるとき、それらはある人にとっては等しく別の人にとっては等しくなく見える場合がある。しかし「等しきそのもの」は人によって等しかったり等しくなかったりすることは決してない。等しい石や木材などの事物とは異なるこの「等しきそのもの」についての知は私たちが生まれる以前にすでに得ていたが生まれる時には忘れられている。これを不完全な等しい事物を見る時、欠けることのない「等しきそのもの」を想起するのである。後にこうした「~そのもの」はアイデア (またはエイドス) とよばれる。つまり私たちには先天的にアイデアがそなわっており、このアイデアによって知識が成立するという主張である。但しここで注目したいのは、このアイデアを想起する場面である。

「われわれが等しきそのものを考え付いたり、考え付きうるのは、等しい事物を見たり、それらに触れたり、それらについてなにか他の感覚をもったり、する以外には出所がない…感覚のうちにあるすべての等しきがかの等しきそのものに憧れながら、それに不足している、ということ、考え付くのは、正に感覚をきっかけにしてでなければならない…」

(『パイドン』 75a)

ここで明らかなのは、アイデアの認識に感覚経験が不可欠であるということである。感覚界と叡智界の峻別という二元論はプラトンの主張を誤解していると言わざるを得ない。感覚経験を積み重ねることによってアイデアの認識はより確かなものとなるのである。もちろんここで、こうした歩みが可能となるのはアイデアが存在するからであるということを急いで付け加えねばならない。それはとにかく、プラトンは感覚経験ばかりではなく、人びとが抱いている通念、あるいは種々の学習、あるいは人生経験などなどを通じてアイデアの認識を己のものとしてゆく哲学の道を描いて見せる。ここで深入りはできないが、『メノン』における、全く幾何学を知らない召使の少年を相手にすすめられる「想起」の実験(『メノン』 82a—86a)、『饗宴』における、美しい身体から美しい魂、美しい魂の生みだす人間の営み、さらに知識の美というように順を追って恋の道を教え導かれてきた者が突如として美のアイデアを観得すると説くディオティマの話(『饗宴』 207a—212a)、『国家』における、

洞窟の比喻と哲学者教育のカリキュラム（『国家』第7巻）など、いずれも人間の精神が日常の経験則によって生活する世界から、肉体や精神の鍛練を経て、さらに教育を通じて次第に育成され、ついに善（美）のアイデアを観想するに至るという主張を示している。その際各ステップはその前のステップをいわば踏み台にしており、欠くことができない。つまり断絶はここにはないのである。

最後にアウグスティヌスにプラトンをあきらめさせ、カントに「要請」というかたちでしか認められなかった善のアイデアの実在性について。ソクラテスが対話の相手に「正義とは何か、勇気とは、敬神とは、友愛とは…」との問いを発する時、自分は無知ゆえに答えが分からないため教えてほしいのだといつも断わっている。そのくせ相手が回答を出すとさっそく吟味にかけ、論駁してしまう。ではソクラテスはニヒリストだったのか。決してそうではない。「～とは何か」の問いにたいして明確な答えを示すことができなくても何か答えがあるのであり、彫刻家が大理石の不要な部分をそぎおとして彫刻を刻みあげるように、対話を通じて答えを刻みあげることができるのだとの彼は信念をもっていたことは確かである。プラトンはその答えを「～そのもの（正義そのもの、勇気そのもの、…）」そして「アイデア（またはエイダス）」と名付け、個々のものや行為はそのアイデアを分有することによって（またはアイデアが臨在することによって）その性格を獲得する、との説明方式を案出した。ここで注目すべきは、ソクラテスの信じていた答えの存在をプラトンも継承し、まずアイデアという語をあて、その「アイデアが存在する」との信念にたって探究を進めていることである。「アイデアが存在する」というのはいわば仮設（ヒュポテシス）であり、知識獲得の場面ばかりではなく行為の場面でも、この仮設を前提にして判断を下すのである。最初は明確な言葉で記述することができなくても、いくつもの場面を経験することによって次第に自分の血肉となり実在として実感するのである。これは「アイデアが存在する」という方に賭ける賭けといえよう。「善のアイデア」はこれらもろもろのアイデアをアイデアたらしめるものであり、普遍的な価値尺度になるものである。私たちが「普遍的価値尺度が存在する」という方に賭けて生活するか、「普遍的価値尺度など存在しない」という方に賭けて生活するかの違いは、科学の探究において「なにか真実、真理が存在する」との前提に立って進むか、そのようなものは存在しないとの前提に立って進むかの違いである、と主張した外的外れであろうか。

それはとにかく、『パイドン』でのシミアスの次の言葉は、なにか絶対確実かどうかはわからないながらこうしたひとつの信念に立って生きてゆくこうした人生航路を暗示する。

事柄の真実がどうあるかを他人から学ぶか、自分自身で発見するか、あるいは、もしこれら二つの方途が不可能であれば、人間の言論のうちからとにかく最善でもっとも反駁され難いものを自分の身に引き受けて、あたかも筏に乗るようにこの言論の上に乗る危険を冒しつつ人生を渡りきらねばならないのです。

（『パイドン』85d）

このせりふは、ソクラテスが万物の原因根拠を探究するにあたって行き着いた次善の策（「第二の航海」）としてのいわゆる「ヒュポテシスの方法」が紹介される場面の導入部に登場する。このヒュポテシスの方法は結局、アイデアが存在するとのヒュポテシスにたって、これと調和する言論を真、調和しないものを真ではないと定めて探究を進めるものであることが後に明らかにされる。（『パイドン』100a—101d）シミアスはソクラテスの探究方法ばかりではなく、師の人生態度を実感しているといえよう。以下こうした探究態度や生活態度を示唆する句をいくつか拾い上げて見る。

[この地上および地下の世界のありさまと、死後の魂の運命を物語るミュートスの後で]

われわれの魂とその住処についてなにかこのようなことがある、と考えるのは適切でもあるし、そのような考えに身を托して危険を冒すことには価値がある、と僕には思われる。——なぜなら、この危険は美しいのだから——

（『パイドン』114d、既出）

[『ゴルギアス』で対話をおえたソクラテスのまとめ]

さて、それなら、いまここに現れてきたこの説を、ぼくたちの人生のいわば道案内人としようではないかね。その説はぼくたちに、生きるのも、死ぬのも、正義やその他の徳を修めて進むという、この生活態度こそ、最上のものであることを示してくれているのだ。だから、さあ、この説について行こうではないか。

（『ゴルギアス』527e、加来彰俊訳）

[学習は想起にほかならないことを実験でしめたあとの結びの言葉]

そこで、もしわれわれにとって、もろもろの事物に関する真実がつねに魂の中に在るのだとするならば、魂とは不死なものだということになるのではないだろうか。したがって、いままたまた君が知識を持っていないような事柄があったとしても——ということとはつまり、思い出していないということなのだが——心をはげましてそれを探究し想起するようにつとめるべきではないだろうか？

（『メノン』86b、藤沢令夫訳）

[『国家』の最終巻、死後の魂が輪廻転生で次期の生を選択する場面での神官の言葉]

「これは女神アナнкеの姫御子、乙女神ラケシスのお言葉であるぞ。命はかなき

魂たちよ、ここに、死すべき族がたどる、死に終るべき、いまひとたびの周期がはじまる。

運命を導くダイモン（神霊）が、汝らを籤で引き当てるのではない。汝ら自身が、みずからのダイモンを選ぶのである。

第一番目の籤を引き当てたものをして、第一番目にひとつの生涯を選ばしめよ。その生涯に、以後彼は必然の力によってしばりつけられ、離れることができぬであろう。

徳はなにものにも支配されぬ。それを尊ぶか、ないがしろにするかによって、人はそれぞれ徳をより多くあるいは少なく、自分のものとするであろう。

責めは選ぶものにある。神にはいかなる責めもない。」

（『国家』617e、藤沢令夫訳）

おわりに

プラトニズムと聞くとプラトニック・ラヴを連想するむきは多いかもしれない。肉体を軽蔑し精神的愛を至高のものとするプラトニック・ラヴは、けがれなき男女の崇高な愛として中世の騎士道物語をはじめ純愛物語となって、かつては人びとの、とくに若い男女の心をひきつけた。（『吾輩は猫である』の越智東風君は漱石先生のこの風潮に対するひやかしであろう。）しかし、現代ではフラストレイションからの解放が安定した社会の必要条件の一つとされるところから、プラトニック・ラヴは軽蔑の的になりそうである。プラトニズムも同様で、感覚を通じて経験する生の現実、喜怒哀楽の伴う肉体を備えた生身の人間、そうした人間たちがうごめく社会を幻影として切り捨てて、アイデアの世界に逃避するとはもってのほかであるとの非難が浴びせられる運命にありそうである。上にとりあげたニーチェ以外の三人の哲学者からこうした非難を読み取るのは行過ぎであろう。しかし彼らの深層心理にはこうした傾向があると感じるのは筆者のひがみであろうか。それはとにかく、プラトンは決して世捨て人ではなく、晩年まで既存の習慣、制度、法律を吟味検討し、より優れたものに止揚してゆく努力を続けていたことは、最晩年の著作とされる『法律』からも明らかである。この際彼は常に人間にとって「肝心のこと」がある、との揺らぐことのない確信をもって、一步一步を刻んでいるのである。拙論で、プラトニズムの名のもとで見落されたたものを拾い上げることができたとすれば幸いである。この「肝心のこと」に「ホモ・コントリービュエンス」を代入して考察することは今後の課題である。